

# タイ・キングモンクット工科大学および 泰日工業大学訪問報告

小松 正明

## The Report on visit to the King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang and the Thai-Nichi Institute of Technology.

Masaaki KOMATSU

**Abstract** – National Institute of Technology, Kushiro College has established the Academic International Exchange Agreement with King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang (KMITL) on August 28, 2013. The agreement of student/stuff exchanges is to establish and develop teaching and research links between each Institute. Based on this agreement, Kushiro College had accepted 21 students from Thailand since then. And we had a meeting to evaluate and review the five-year activities and exchange MOU at KMITL, Thailand this year. Also we could have a chance to visit Thai-Nichi Institute of Technology to discuss the possibility of future's student exchange program. This paper reports on visit to the King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang and the Thai-Nichi Institute of Technology on September, 2017.

**Key words:** International exchange Agreement, Thai-Nichi Institute of Technology (TNI)

King Mongkut's Institute of Technology (KMITL), Cross-cultural understanding

### 1. はじめに

平成25年（2013年）にタイ、バンコクにあるキングモンクット工科大学ラカバン校（以下、「KMITL」という）と学生交流を中心とした交流覚書(MOU)を締結し、学生交流を開始している。来年度、平成30年度で交流協定締結5年目を迎えることから、平成29年9月5日、岸校長、小松国際交流副室長がKMITLを訪問し、これまでの交流活動の評価、最新の動向についての情報交換、今後の活動についての方向性、MOUの改訂等について協議を行った。KMITLからは学長代行、副学長（対外協力担当）、副学長（国際交流担当）、国際本部スタッフが出席し、活発な協議を行った。このKMITL訪問に併せて、釧路高専から派遣した専攻科生3名の研究室を訪問し、派遣学生との面談、指導教員との懇談も行うことができた。

また、タイ、バンコクには高専機構が交流包括協定を締結している泰日工業大学(以下、「TNI」という)があり、日本の大学、高専との交流を積極的に推進し

ていることから、翌9月6日にTNIを訪問し、TNIおよび釧路高専の概要説明を相互に行い、今後の交流の可能性等について意見交換を行い、TNI学内の施設設備の見学を行った。

### 2. 訪問日程概要

以下に今回の訪問日程概要を示す。今回訪問した9月は雨季とのことで、主に夜半に雷雨が激しく、日中もTNI訪問時に激しい雷雨に見舞われたが、いずれも地域限定的な雷雨であるとの説明であった。タイの夏は過ぎたとはいえ、日中は気温が30度、湿度が75%あり、歩くと汗が噴き出るような気候であった。

9月3日：釧路→羽田移動、東京泊

9月4日：羽田→バンコク移動、KMITL国際部スタッフ  
出迎え、スケジュール打合せ

9月5日：KMITL訪問

9月6日：TNI訪問

9月7日：バンコク→羽田移動

9月8日：羽田着、羽田→釧路移動

\* 釧路高専創造工学科

### 3. キングモンクット工科大学訪問

#### 3. 1 KMITL側出席者

9月5日、朝10時にKMITLを訪問した。KMITL側の出席者は以下のとおり。

##### (1) Supan Tunbjitkusolmun, Ph.D.

Senior Executive Vice President for Academic Affair  
(Provost)

大学の学術系の学部長で、今回の訪問時は学長が海外出張で不在とのことで、学長代行として出席。

##### (2) Tanawan Pinnarat, Ph.D.

Vice President for Corporate Relations  
対外協力担当の副学長、女性。

##### (3) Chaiyan Jettanason, Ph.D.

Vice President for International Affairs  
国際交流担当の副学長、36歳と大変若い。

##### (4) その他、国際部スタッフ

#### 3. 2 KMITLの最新動向

まず、KMITLを4年ぶりに訪問し、その変化、成長戦略に驚かざるを得なかった。以下、感想を含め、主な情報を示す。

(1)KMITLは工学部の中に、International Programs を設置し、英語のみのカリキュラムを組んで留学生の呼び込みはもちろん、自前でInternational Engineerを育成するコースを設置している。現在、Computer Innovation Engineeringをはじめ、6コースが設置されている。

(2)全く新たな試みとして、国際中学高等学校(International Demonstration School)を本年度から設置、入学年次が中学1、2年、高校1年に相当する学生を集めた国際学校(International School)を併設し、KMIDSと命名して運営を開始していた。授業は全て英語で行われ、教員もほとんどが米国から採用しているとのこと。

International Programを持つKMITLとしては優秀な学生を中学、高校から育成する戦略であるが、この発想の転換には驚かざるを得ない。キャンパスのバスケットコートで中学生らしき若者がコーチについてバスケットの指導を受けていたが、このコーチの指導は流暢な英語であった。タイも日本と同じように少子化が進んでおり、優秀な学生を大学が確保したいという思いはタイの大学も同じ。この戦略が3年後、6年後にどうなっているか評価が楽しみでもある。

(3)KMITLでは現在約200の大学、研究機関と交流のMOUを締結しており、今後も交流機関を増やす予定である。特に米国の大学と学術交流協定を結ぶにあたって

は、大学ランキングを必ず聞かれるので、ASEANでの大学ランキング10位内に入るべく戦略を練っている状況である。KMITLは現在、成長戦略の上に立って大きく動き出している。

(4)交流MOUは約200件に対して、年間の交流学生、教員数は約400名との説明であった。MOU件数に比較し、実態の交流件数は多く無いようで、留学資金支援などの予算問題もあるようであった。この点、JASSO奨学金支給がある釧路高専は魅力のようである。新たな協定校の開拓にも熱心で、先月は副学長(国際交流担当)と国際部スタッフがヨーロッパに出張し、フランスでは6大学を訪問したとのことであった。

(5)KMITLでは世代交代が進行している。かつて、日本の大学で学位を取得した世代の教員は定年(60歳)を迎える時期に来ており、これに替わり、米国MITや英国、フランスで学位を取得した若手研究者・教員が確実に増えている。フランスの大学で学位を取得した国際交流担当の副学長は36歳という若さで、エネルギーに世界を飛び回っている。今回、海外出張中で会えなかったが、大学パンフレットに載っている学長は米国MITで学位を取得、40歳前後であろうか、大変若い。研究者としての実績も高く、インターネットで検索ができる。学長のメッセージからは、「2020年までにASEANでトップ10の大学になること」との戦略を明確に打ち出し、そのために学長就任時に以下の五つの公約(Five Policies)を提言している。

1. Good Governance & Management
2. World Class Academic Programs
3. Innovative Research Clusters
4. Conductive Infrastructure
5. Quality of Life & Harmony

会議で学長代行の発言にあった「ASEANでのトップ10」はまさしく学長が打ち出した戦略であり、KMITLの戦略は、「To be World Class」が浸透している。2013年当時、交流協定締結で訪問したときの学長は、その後、汚職等の問題があつて失脚している。当時の国際部スタッフからも学長の女性問題など、耳打ちされることがあつた。新たな学長が打ち出した「Good Governance & Management」はまさしくこの反省に立っていると考える。

かつて日本のODAで成長したKMITLの姿はそこには無く、ASEANでのトップ10、ワールドクラスを目指す先鋭的な大学がそこにある、という思いであった。



写真.1 学長代行と記念品交換



写真.2 ミーティング後の記念撮影, 右二人が副学長

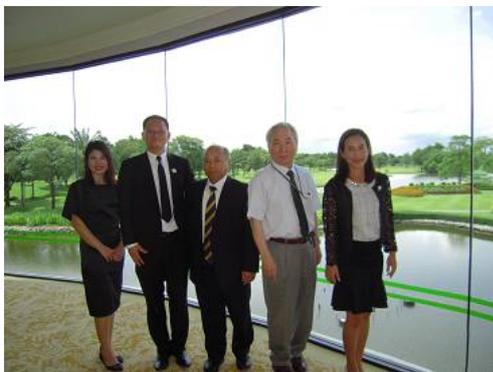


写真.3 ゴルフクラブハウスでのビジネスランチ

整理されており, 引率教員および在外研究で滞在した電気工学科・千田教員, 齋藤教員の写真もよく整理されていた。また, 2013年には電子工学科の学生・教員50名がKMITLを訪問し, キャンパスツアー, 文化交流などでお世話になったことも忘れてはいけない。

釧路高専からは, 釧路高専概要説明(学科改変等を含む), これまで5年間の受入学生評価についての説明・報告を行った。説明資料の抜粋を図.1, 2に示す。

釧路高専における受入イベント, 異文化交流については, その種類の多さに感謝された。今後の課題は両機関とも如何に交流活動を活性化させるかであるが, 予算の問題, 教員や学生のメンタリティの問題など, 共通の問題がある。

表.1 KMITLがまとめた派遣・受入実績

Year	2013	2014	2015	2016	2017
派遣	4	5	5	4	3
受入	1	1	1	6	7
グループ	50	0	0	0	0

## 1. Acceptance students History

FY 2013 Incoming Students from KMITL			
Period of Training: May 1 - May 31, 2013			
Mr. Suka TECHOTMAKORNI (Tan)	Mr. Pathavee CHANGSAN (Sand)	Mr. Kanchant BUPPHACHUEN (Pee)	Mr. Supachai METTAPON (Big)
Accepted department: Department of Electronic Engineering	Accepted department: Department of Electrical Engineering	Accepted department: Department of Architecture	Accepted department: Department Of Mechanical Engineering
Prof. Dr. Taka	Prof. Dr. Komatsu	Prof. Dr. S Sato	Assoc. Prof. Dr. Maeda
Project theme: Space Communication systems	Project theme: Communication System Design for Weather Satellite "HOAA" Ground Station	Project theme: Hoped Zone	Project theme: Digital design education using 3D printer
Outgoing student to KMITL			
Mr. Yuki YOSHIMURA			
Period of Training: August 11 - September 30, 2013			

図.1 釧路高専からの受入評価説明資料

### 3. 3 国際交流に関する情報交換, 協議

#### (1) 受入・派遣評価

KMITLを訪問するに当たって, 釧路高専での受入学生の評価を説明・報告するための資料を出張前に作成した。いざ, 5年分の受入学生の資料をまとめるとなると, まとまって整理された資料も無く, 学生の成果報告会資料も見つからない有様であった。

KMITLの会議では, 最初にKMITL側から資料配布があり, 釧路高専との交流のログが正確に整理されていた。200の大学・高専とMOUを持ちながら, よく整理されているとの印象であった。

表.1はKMITL側が示したこれまでの受入・派遣人数である。それぞれの受入年度ごとの記録写真もよく

## 3. Evaluation Overview

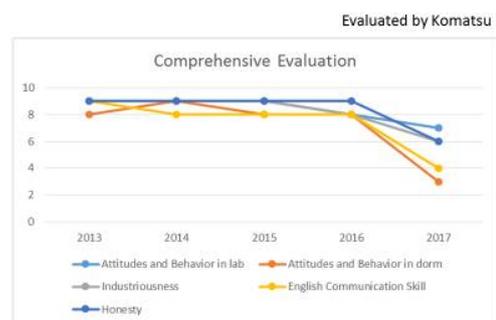


図.2 5年間の受入学生総合評価

特に、KMITL学生の総合評価は2017年度が極端に低いことについては、「どんな問題があったのか」、副学長のTanawan氏から質問があり、寮生活に問題があったことを正直に告げた。Tanawan氏からは謝罪と共に、来年度以降、本件については派遣学生の選抜時にフィードバックをかけて二度と起こらないようにしたいとの発言があった。

今年度の受入KMITL学生3名の英語力が低いことについては、国際部スタッフも分かっていたようである。通常行われる選抜時の英語面談が担当教員の都合でなされず、国際部が面談をしたときに分かったようだが、学生を派遣する学部側判断としては、「研修には問題が無いレベル」との判断で、JASSO奨学金の条件、GPAが2.3以上をクリアしていることもあり、送り出したようである。

結果的にコミュニケーションの問題が随所で発生し、受入側としても大変苦慮する場面が多かった。

残念ながら、英語のコミュニケーション力不足は日本側にもある。昨年度派遣した4名については、KMITL研修中は常に行動を共にし、生活の不满をためている様子が伺えたが、これは全て英語コミュニケーション力不足から来るもので、理解、共感できないものに対して起こる「異文化拒否」の症状であることが後から分かった。このようなことでは、KMITL側に迷惑をかけたこと私からも謝罪せざるを得なかった。

ワールドクラスを目指すKMITL側にとっても、学生のモチベーション低下の問題は同様に抱えているようである。

### 3. 4 MOUの改訂について

2013年に調印した学生交流に係るMOU改訂について調整を行った。改訂に係る箇所は、高専機構・釧路高専の英語表記が変わったこと、KMITLからの受け入れ時期がセメスター変更の関係で6月になったことのみで、特段、現状の交流プログラムに影響する部分はない。このため、5年目となる来年度までに双方で検討し、修正を行う場合はその旨申し出てもらうこととした。

### 3. 5 派遣学生面談、指導教員との懇談

KMITL訪問時に併せて、釧路高専から派遣中の短期留学生（専攻科1年、3名）の研究室を訪ね、研修の様子や感想を聞き、また指導教員、研究室メンバーに学生たちの研修の様子を尋ねた。

研修最後の週ということもあり、「時間があっという間に過ぎた」ということを異口同音に述べていた。



写真.4 専攻科・佐々木君と研究室指導教員(右から2番目)



写真.5 専攻科・羽賀君と指導教員(右から2番目)



写真.6 専攻科・村田君と指導教員(左から2番目)

研究室によっては、大学院生、卒研生、併せて20名も抱えている教員もいる。このような研究室は、学生の活気もあり、ユニークな研究を進めている。博士課程の学生を4、5名抱えている指導教員もいて、テーマ選定も大変であるが、大学院生が学部卒研生の研究指導を行うため、研究室も成り立っているものと思われる。

英語コミュニケーションについては、概ね問題ないようであったが、ある若い指導教員が受入学生の英語力に不満を持っていることを研究室訪問時に国際部スタッフから耳打ちされた。研究室訪問の感想だが、大学を出たばかりの若い指導教員で、学生だけの責任ではなく、指導教員の指導力不足も正直感じた。

派遣前に、学生たちにはKMITLでの研修テーマは必ずしも自分の特別研究にマッチングが取れるものではないことを説明しており、与えられたテーマに真摯に取り組んでいた。

ただ、自分の研究テーマにこだわり過ぎて、土木工学科の研究室に配属された学生がいた。電子工学専攻の学生にとって、畑違いの学科は専門用語も異なるので、辛い研修になったものと思われるが、自分の特別研究に執着せずに、電子工学分野の研修テーマを見つけるべきであった。KMITL到着時の初期に、英語でのコミュニケーションを上手く取らないと研修テーマのミスマッチングが発生するので、今後の反映事項である。

### 3. 6 工学部長との面談

KMITLからの派遣元は工学部がメインであり、釧路高専学生のKMITL受入も工学部になる。今回は、国際部スタッフ、Lalitaさんの取り計らいで、工学部を訪問し、学部長、および学部の国際交流担当教員に面会した。

面会者を以下に示す。

- (1) Assoc. Prof. Komsan Maleesee  
Dean of Engineering 工学部長
- (2) Assoc. Prof. Dr. Uma Seeboonruang  
Assistant Dean for Finance and International Affairs 工学部長代理 (予算・国際交流担当)
- (3) Yossiri Ariyakul, Ph.D.  
Assistant Dean for Relation Affair  
工学部長代理 (対外担当)
- (4) Tharinee Lumyong  
Head of International Affairs at Faculty of Engineering (工学部国際交流室)
- (4) Assistant Prof. Dr. Wipoo Sriseubsai  
Department of Industrial Engineering  
2016年のKMITL引率教員

工学部長室に案内され、学部長、その他関係出席者と懇談を行った。予定外の訪問ではあったが、今回の訪問の経緯を説明し、また本日の会議の内容や派遣学生3名の研究室をそれぞれ訪問したことを説明し、交流の協力について謝意を表した。

今回の訪問で分かったことは、学部ごとに国際交流室があり、派遣学生の人選や引率教員の決定を行っていること、学内全体の国際交流マネジメント・調整、国際交流戦略展開、協定校への窓口は副学長を置く国際交流本部 (Department of International Affairs)

が担当していることである。

このため、大学として派遣学生の決定までは多くの学内プロセスが必要であり、受入研究室決定まで多くのプロセスがあり、これまでの釧路高専からの連絡タイミングでは遅すぎることも理解できた。これは逆に釧路高専の学生を派遣する場合にも当てはまり、受入研究室決定までに多くのプロセスがあるため、早期に派遣学生に関してKMITL側と連絡を取り合うことが必要である。

## 4. 泰日工業大学訪問

### 4. 1 TNI側出席者

9月6日、朝10時に泰日工業大学(TNI)を訪問した。TNI側の出席者は以下のとおり。

#### (1) Dr. Bandit Rojarayanont

President

学長は東京工業大学で学位を取得しており、日本語が流暢である。

#### (2) Porn-anong Niyomka Horikawa

Vice President, International and Public Relations

副学長で国際交流広報担当、女性。東北大学で学び夫が日本人のためLast NameがHorikawaである。

#### (3) Assoc. Prof. Ruttikorn Varakulsiripunth, Ph.D.

Dean, Faculty of Information Technology

情報技術学部の学長で、KMITLを定年退職し、TNIに移籍した。KMITLでは副学長(国際交流担当)で、釧路高専に招聘し講演を依頼したことがある。今回のTNI訪問はRuttikorn先生にお願いして実現したものである。

#### (4) Prajak Chertchom, Ph.D.

Assistant Dean for Academic Service

#### (5) Daisuke Kosaki (児崎 大介氏)

International Relations

現地採用の日本人で、国際交流スタッフである。

### 4. 2 TNIの概要、最新動向

学長からのTNIに関する概要説明を要約すると、以下のとおりである。

(1) 泰日工業大学 (Thai-Nichi Institute of Technology) は、タイ-日友好とタイ産業界の人材育成を目的として設立された泰日経済技術振興協会 (TPA: Technology Promotion Association) を母体としている。TPAは1973年に設立された非営利団体で、タイで各事業や産業、社会貢献活動を行っている。

(2) TPAは2003年の創立30周年を契機に、産業界へ

の多岐にわたる研修事業、実績を踏まえ、TPA内外の専門家ネットワークを活用することで、優秀な産業人材の育成とタイ産業界への人材供給のために大学設立を目指した。特にこの事業は日本企業と連携することにより、「タイにおける日本型ものづくり実践教育」を中核とする特色ある大学設立を目指した。

(3) 10年前の2006年、タイ教育省による大学設立が認可された。学部構成は以下に示すとおりである。

●工学部：

- 自動車工学
- 生産工学
- コンピュータ工学
- 産業工学(Industrial Engineering)
- 電気工学

▼情報技術学部：

- 情報技術学
- マルチメディア技術学
- ビジネス情報技術学

◆経営学部：

- 工業経営学
- 日本語・経営学
- ビジネス/工業経営学
- 国際経営学
- 会計学
- 日本的人事管理学

■大学院修士課程：5課程

TNIは商工業界のニーズに応えるべく設立され、「改善」「物づくり」「反省」「敬意」「誠実」「公益」をモットーとしている。在籍学生数は約4,400名で、就職率は100%で、日系企業に約半数が就職している。学生全員に外国語教育として、日本語、英語が必修科目になっている。

年度の新入学生は1,500人であるが、タイも少子化が進んでおり、学生確保、定員充足が厳しい実情である。また、KMITL同様、来年からInternational Programをスタートするとのことである。

#### 4. 3 TNIの国際交流

日本の大学、高専等とは58機関の交流協定を締結、ASEANの大学とは8大学との協定締結をしている。高専機構とは包括協定が締結されており、5つの高専（長岡、長野、鶴岡、香川、サレジオ高専）と交流を行っている。長岡高専とは自動車の関係で交流が盛んであるとの紹介があったが、キャンパス内の施設見学をし

ているときに、偶然ではあったが、長岡高専学生約10名と引率教員2名を含むグループがTNI学生とARDUINOをベースにしたプロジェクトを協同で実施している場面に出くわした。これは長岡高専と交互に実施しているプロジェクト(PBL)であり、開催校がプロジェクトテーマを企画する。今回のテーマは“IoT-Oriented Hackathon Competition”と銘打って日本人、タイ人学生がチームを組んで課題に取り組んでいた。（写真.10参照）

TNI学生の海外派遣のうち、日本には毎年300名程度を短期留学等で派遣しており、毎年50名に奨学金を支給しているとのことであった。

TNIが受け入れプログラムとして力を入れているものに、8月に10日間実施する「サマープログラム」がある。これは日本の大学、高専学生40名をTNIに受け入れ、TNI学生との交流のほか、マングローブ植林や小学校訪問などのアクティビティが準備されている。このプログラムは、TNI学生が日本語で話したいとの企画もあり、英語でのコミュニケーションを重視せず、また、内気な日本人学生同士の交流も企画のうちであるとの説明があった。ハードルをここまで思い切り下げたプログラムではあるが、海外が初めての日本人学生の背中を押すにはちょうどよいのかも知れない。



写真.7 学長と記念品交換



写真.8 右から学部長、副学長、学長



写真.9 図書館閲覧室



写真.10 長岡高専とのPBL

## 5. おわりに

KMITLを4年ぶりに訪問し、KMITLが協力に推進する新たな国際戦略に、正直驚いた。4年前に比較し、その国際戦略が大きく変わっていたからである。

会議で学長代行の発言にあった「ASEANでのトップ10」はまさしく学長が打ち出した戦略であり、KMITLの戦略は、「To be World Class」がまさしく学内に浸透している。具体的な事例は、工学部の中に、International Programsを設置し、英語のみのカリキュラムを組んで留学生の呼び込みはもちろん、自前でInternational Engineerを育成するコースを設置している。現在、Computer Innovation Engineeringをはじめ、6コースが設置されている。また、斬新な試みとして、国際中等高等学校(International Demonstration School)を本年度から設置、入学年次が中学1、2年、高校1年に相当する学生を集めた国際学校(International School)を併設し、KMIDSと命名して運営を開始していた。授業は全て英語で行われ、教員もほとんどが米国から採用している。International Programを持つKMITLとしては優秀な学生を中学、高校から育成する戦略であるが、この発想の転換には驚かざるを得ない。

KMITLでは現在約200の大学、研究機関と交流のMOUを締結しており、今後も交流機関を増やす予定で

ある。特に米国の大学と学術交流協定を結ぶにあたっては、大学ランキングを必ず聞かれるので、ASEANでの大学ランキング10位内に入るべく戦略を練っている状況である。KMITLは現在、成長戦略の上に立って大きく動き出している。

かつて日本のODAで成長したKMITLの姿はそこには無く、ASEANでのトップ10、ワールドクラスを目指す先鋭的な大学がそこにある、という思いであった。

KMITLとは今後も継続して信頼関係の醸成に努め、活動の活発化を推進したい。

また、今回はタイ訪問の2日目に泰日工業大学(Thai-Nichi Institute of Technology)を訪問し、学長以下、副学長、学部長と将来の学生交流の可能性について懇談する機会を得た。日本の大学、高専等とは58機関の交流協定を締結、ASEANの大学とは8大学との協定締結をしている。高専機構とは包括協定が締結されており、5つの高専(長岡、長野、鶴岡、香川、サレジオ高専)と交流を行っている。

TNIの特色から、日本語を話せる学生や日系企業への就職を希望する学生が多いことなど、交流機関としては日本人学生とはこれまでになかったタイプの交流の可能性、すなわちコミュニケーションのハードルが低く設定できる、などの別な要素が出てくるのではないかと想像している。

TNI側が釧路高専との交流拡大につなげたいのは明確であるが、今後さらに交流の可能性について具体的な検討を推進したいと考えている。

## 参考資料

- [1] 小松正明, 神谷昭基:「フィンランド・トゥルク応用科学大学交換留学生の第1回受入成果について」, 釧路工業高等専門学校紀要第46号, 2012年12月
- [2] 小松正明, 神谷昭基:「トゥルク応用科学大学およびキングモンクット工科大学からの交換留学生の受入成果について」, 釧路高専紀要第47号, 2013年12月
- [3] 小松正明:「留学生受入・派遣による国際交流事業と異文化理解」, 釧路高専紀要第48号, 2015年1月
- [4] 小松正明:「平成27年度留学生受入・派遣の成果と今後の国際交流事業について」, 釧路高専紀要第49号, 2016年1月
- [5] 小松正明:「釧路高専における国際交流活動と今後の展望」, 釧路高専紀要第50号, 2017年1月